

ふくしま飛行協会と連携

フルーツ六次化商品詰合せ

「果物の宝石箱」

ウェブサイト
をしま



「NPO 法人ふくしま飛行協会」さんは、航空公園「ふくしまスカイパーク」を拠点に活動している団体です。スカイスポーツを中心に、今の「ふくしま」を世界に発信しています。福島市内の市民団体同士として、シャロームと様々な機会を連携してまいりました。毎夏の恒例事業「石彫ワークシヨップ」会場もふくしまスカイパークです。

● 風評被害払拭を「果物の宝石箱」

この度、飛行協会からの依頼を受けて合同会社楽膳が六次化フルーツギフト「果物の宝石箱」のデザインをさせて頂きました。果物栽培に適した気候から桃・梨・りんごなど上質な果物を多く生産してきた福島は「果物王国」と称されてきました。しかし原発事故後は風評被害が収まらず、生産者の

の意欲をそいでしまっています。震災の記憶は風化しているのに風評被害は根強い現状を変えたい。厳重な検査体制を経て出荷されていることを伝えつつ、県外の人たちに福島の果物の美味しさを思い出して欲しい。飛行協会の願いから今回のギフトは企画されました。本ギフトは「JA 未来」の協力を得て、安全対策の取組や福島の果物の魅力を伝える内容となっています。ギフトに封入されるてぬぐいにはイラストと共に右記の内容をプリント。使うたびに福島を思い出してもうけ付けです。

● 九月のイベントで県外客に千箱贈呈

飛行協会では毎秋に「スーパースカイアグリ」という航空イベントを開催しています。レッドブル・エアレースパイロットの室屋義秀選手によるエアショーやモーターショー、福島のグルメや土産が楽しめます。世界大会優勝パイロットの室屋選手を目当てに県外から多くの来場者が訪れるイベントとなっています。「果物の宝石箱」は有

料席の来場者千名に贈呈されるのです。スカイスポーツと一緒に福島の果物の魅力も発信するねらいです。

● 障がい者の参加と

二〇二〇年へ向けて飛行協会では福島市と連携し、本ギフトを二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックで選手団への公式ギフト化をめざしています。

今回のギフト作成には、障がいを持つ仲間たちに協力をいただきました。てぬぐいのイラスト作成は、元ベイスティック利用者で今は JA 未来職員の方の K さんに。箱詰め作業はまちなか夢工房に依頼しました。障がいの有無に関係なくみんながオリ・パラを盛り上げようという発信につながることを期待します。(楽膳 大竹)

スーパースカイアグリ 2017 (りんご祭り)

2017 年 9 月 23 日 (土)~24 日 (日) @ふくしまスカイパーク

どなたでも来場できます。室屋選手の演技やヘリコプター遊覧飛行、福島グルメなど盛りだくさん!

ひまわりプロジェクト 2017・栽培報告お送り先

NPO 法人シャローム
「ひまわりプロジェクト」実行委員会
〒960-8035 福島県福島市本町 5-31
(まちなか夢工房内)
TEL/FAX : 024-563-1680
Mail : yukari.k@nposhalom.net (担当川島)
blog : http://shalom-net.jp/himawari/

よろしく
お願いします



- ①直接ご持参いただける方：「まちなか夢工房」店頭で募金箱を設置いたしました
- ②遠方の方：郵便局の郵便振込にてご送金ください

〈お振込先〉
No. 02260-7-90324
宛名 シャローム
通信欄 九州地震お見舞金

熊本・大分県の大地震で被災された皆さまには心よりお見舞い申し上げます。シャロームでは熊本大地震・お見舞金のご寄付を募っております。皆さまからお預かりしたお見舞金は、グリーンコープ共 同体、生活協同組合連合会、グリーンコープ連合さんを通じて九州地方へお届けいたします。

熊本大地震
お見舞金のお願ひ

日本の芸能と半田銀山

〈講師〉 ややま ひろしさん (漫画家 うつくしま芸人会代表)
〈日時〉 2017 年 9 月 9 日 (土) 13:30~15:00
〈場所〉 まちなか夢工房 2 階 (参加費) 500 円

〈講演内容〉

今回は日本の芸能や桑折町の半田銀山と、文化との関わりについてお話しいたします。日本の芸能には、講談、落語、浪曲、歌舞伎などがあります。それらは島国という特殊な環境から、独自の文化を築いていくことになりました。また、桑折町の半田銀山はハンダづけの技術が開発された場所であり、世界共通語「ハンダ」の語源となっています。半田銀山から銀が出るとすぐ幕府になりました。金、銀を目当てに各地から大勢の人々が桑折町に集ってくることにより、多種多様な文化が集まって、独自の文化や風俗を生んでいきました。

*参加人数把握の為、地元学講座各回ごとに欠席のご連絡をいただければ幸いです。(tel 024-524-2230 または fax 024-525-8285 までお願いいたします)

教養講座
地元学を考へる

第百六十五回 予告



八月十五日が今年も巡ってきた。終戦記念日、戦後世代である者にとつては、過去の歴史の「コマ」のように思っていた。悲惨な映像や記録を目にするとき、今は平和でそんなことはない。自分たちはそんな時代でなくて良かったと思う。親の世代が経験してきた時間も子どもの世代ではその感じ方に大きな違いがある。

人の死を目の当たりにして経験した戦争体験、それは、被害者・加害者などという次元を超えた人間社会の悲惨を味わった当事者の視点を感じる。戦後世代では、幸いにしてその悲惨を味わうことがなく済んできた。平和は反面で、戦争に関わる当事者意識を希薄化させている。

お盆でお墓参りに行くと、墓碑銘の中に戦争で戦死した名前がいたる所に刻まれている。親の代の身内を戦争で失い、その後の家族関係にさまざまな影を落とす現在まで至っている。時間の経過は、人の心を癒し、悲惨な記憶も思い出しに代えていく。今を生きている私たちには、歴史の教訓として戦争を学び、戦争を起ささないことを戦争で命を落とした人々への供養ではないかと思う。

世の中は、戦争に向かって突き進んでいるように思える。平和への思いを改めて強くする。